

令和元年6月18日現在

機関番号：13904

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K16681

研究課題名(和文)戦後における文学賞の競合と社会的意義の拡大に関する研究 1950年代まで

研究課題名(英文)Social significance of literary prizes in postwar Japan to the 1950s

研究代表者

和泉 司 (IZUMI, TSUKASA)

豊橋技術科学大学・総合教育院・准教授

研究者番号：50611943

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、戦後日本の文学賞が果たした役割について調査と検証を行った。1940年代から50年代の商業文芸誌・同人文芸誌を対象とし、商業文芸誌が創設した新しい文学賞と、既存の芥川賞・直木賞の関わりや、芥川賞・直木賞が、戦後の経済成長下で権威となり、大規模なメディアイベントとなった過程について考察した。具体的には、1956年に直木賞を授賞した邱永漢の活動と発表テキストの調査と、同人文芸誌「文芸復興」や同じく「碑」で活動した作家である長崎謙二郎・田村さえの作家活動の調査から、文学賞が戦後社会の文学イメージの方向性を決定づけ、それに左右される作家・読者・市場の関わりについて分析できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

1950年代に文学賞を授賞して作家活動を展開した邱永漢と、文学賞主体の戦後の文学市場から離れていた戦前にデビューした中高年作家たちの活動をそれぞれ調査し、文学賞が戦後日本の文学・文化運動の中心となっていったことを確認した。文学賞＝芥川賞・直木賞を中心とした戦後の文学市場のあり方は、作家志望者や読者層の拡大に寄与し、経済成長と進学率の上昇と相まって文学を広く社会に開いていった。しかし一方で、文学賞の形式化にもつながった。20世紀後半以降の文学・文化の方向性がこの時代の形式化に起因することを確認することができた。

研究成果の概要(英文)：This study explores the role of literary prizes in post-World War II Japan, by considering professional and amateur writers up to the 1950s. I summarized my findings regarding new literary prizes in this era, as well as relations between the Akutagawa Prize and the Naoki Prize. Further I considered reasons the Akutagawa and Naoki Prizes gained so much authority and became high profile media events in the postwar period. Specifically, I focused on Eikan Kyu, awarded the Naoki Prize in 1956, and Kenjiro Nagasaki and Sae Tamura, who published extensively in amateur literary journals of the period. I confirmed that literary prizes established the popular image of literature in postwar Japanese society.

研究分野：近現代日本語文学

キーワード：文学賞 同人誌 邱永漢 田村さえ 長崎謙二郎 芥川賞 直木賞

## 1. 研究開始当初の背景

日本近代文学において文学賞が果たした役割と機能を問い直し確認することが主題である。本研究は、昭和前半期における文学賞の登場を出発点とし、戦時期を挟んで、主に戦後直後に生まれた短命文学賞と、芥川賞・直木賞が復活・発展した1950年代までの交錯・相互影響関係の分析を目指した。

文学賞に関する研究は、「芥川賞」「ノーベル文学賞」といった個別の賞についてのものか、作家研究の中で、その受賞(または落選)の与えた影響や意義を問うものが中心で、文学賞をシステムとして扱ったのは、紅野謙介『投機としての文学』(新曜社、2003年)などに限られていた。

一方、植民地文学研究において、植民地出身者が日本の中央文壇へ進出する契機として文学賞に言及されることが多々あった。中根隆行『朝鮮表象の文化誌』(新曜社、2004年)や河原功『翻弄された台湾文学』(研文出版、2009年)などがそれにあたる。

また、小谷野敦の『文学賞の光と影』(青土社、2012年)、直木賞研究家・川口則弘の『芥川賞物語』(バジリコ 2013年)『直木賞物語』(バジリコ 2014年)、大森望・豊崎由美の『文学賞メッタ斬り!』シリーズ(PARCO出版 2004~2012年)など、文芸評論家による鋭い分析は多々生まれていたが、歴史的考察やテキスト分析は行われていなかった。

このような状況から、本報告者は、これまで、特に学術研究上ほとんど注意を払われてこなかった文学賞の仕組みが、日本の文学・文化の発展や文学市場の拡大、読者層の変化に大きい影響を与え続けてきたのではないかと、という認識を持つに至り、その歴史的経緯と働きについて具体的に調査・分析すべきであると考えた。それがこの文学賞研究の計画を構想したきっかけである。文学賞を通じて近現代日本の文学運動や作家、テキストの登場と移り変わりを見ていき、さらにそれらがどのような形で社会・読者に受容されていったかを理解することで、これからの日本社会における文学・文化のあり方や意義を把握し、さらにアジアを初めとする海外との文化交流や流通について考える一助となるだろうという期待も持った。

## 2. 研究の目的

本研究に先立ち、報告者は1919年創刊の総合雑誌『改造』誌上で実施された文学懸賞である『改造』懸賞創作についての調査・研究を行っている(研究課題番号:25770091 若手研究(B)「日本近代文学における文学賞の意義と作用-『改造』懸賞創作を中心に」)。この研究計画の成果を出発点の一つとして、戦前の日本社会に登場した文学懸賞が戦後になって文学賞として社会で認められるようになり、権威として受容されていく過程における作家たちとそのテキスト群、そして商業誌・同人誌双方含めた文芸誌の活動状況を把握することを目的とした。文学賞とその出発点である文学懸賞について調査・分析することは、20世紀後半から現在までの日本に「文学」の位置付けと存在意義の確認につながり、ひいては政治・経済・文化等各側面における文学・文化の重要性と役割を実際的に把握していくことが可能になると考えたからである。

このような出発点を経て、戦前期(1945年まで)の文学懸賞の有り様と、その期間に登場した芥川賞・直木賞の影響力の拡大を確認し、戦後社会における文学賞の意義の変遷を研究するため、本研究計画を構想した。戦前期、芥川賞・直木賞の登場と定着によって、文学懸賞という名称に込められた金銭目的という軽視は払拭され、文学賞という新たな呼び方が一般化していった。さらに、戦後になって新たな作家・新たなテキストの需要が高まり、それが様々な新規文学賞の誕生を招いた。1940年代後半から50年代にかけては、数多くの雑誌が登場しては消えていったが、それと同様に、様々な文学賞が登場し、短期間で途絶する事態も生じていた。この文学賞の変容期に、戦後を代表する多くの作家が生まれ、活躍していくことになる。一方で、作家デビューが戦時下と重なり、十分な初期活動が出来ないまま、戦後の文学賞変容期中高年にさしかかった作家たちも数多く存在した。これらの人々は、同人文芸誌を立ち上げて活動を継続しつつ、商業文芸誌とその市場へ注目し続けた。そこには文学賞への希求と蔑視が同居する錯綜した想いが表れている。このような形でも、文学賞が文学活動の時空において、中心軸となし、その活動を左右していたと言えるのである。

このような問題意識から、本研究では、まずは1950年代までの文学賞の動向を確認し、その影響や文学賞の社会的意義の拡大の把握を目指した。1945年のアジア太平洋戦争の敗戦後、日本では活字メディアの需要が急速に高まり、多くの書籍・雑誌が出版されている。そして新たな書き手も求められ、その過程で新しい作家を見出す手段として文学懸賞が利用されるようになっていったのである。その時、文学懸賞は文学賞と呼ばれるようになり、新設の文学賞には「水上瀧太郎賞」(『三田文学』)、「夏目漱石賞」(『小説と読物』)、「横光利一賞」(『改造文藝』)と、物故作家の顕彰を兼ねた命名がされていた。もちろんこれらには、芥川賞・直木賞の影響が考えられる。そして、1956年、石原慎太郎がデビュー作の「太陽の季節」によって芥川賞を受賞する段階で、文学賞が文学市場だけのものではなく、社会全体のメディアイベントに変わっていく。高度経済成長の始まりとともに、書籍・雑誌はイベントと両輪となって市場を形成していくことになる。その意味で、1950年代は文学と文学賞にとって、非常に重要な時代であることを検証することにしたのである。

### 3. 研究の方法

(1) 本研究計画は、戦前の文学懸賞が戦後の文学賞へどのように接続したのか、そして戦後社会において文学賞の存在が大きくなっていく過程での、文学の有り様・社会における存在の変遷を調査・検証することを目的としている。そのため、戦前に文学懸賞を実施していた雑誌・文芸誌や、受賞作家・当選作家・候補作家らによる文学テキストの収集・確認・分析を行いつつ、戦後から1950年代にかけての文芸誌・文芸同人誌、受賞作家・候補作家らの文学テキスト・回想記の収集・確認・分析を行った。また、戦後に創設され短期間で終わった文学賞の調査も同時に実施した。さらに、受賞作家・候補作家のご家族から、インタビュー・資料提供という形でのご協力をいただき、それらの分析を通じて行われた。

(2) 研究計画進行中に、国際学会において各時点での研究成果報告を行った。

(3) 収集・分析した資料体を文学懸賞文学賞ごとにとりまとめ、情報の可視化を図る。受賞作家・受賞作、候補作家・候補作などの変遷から、文学懸賞文学賞の存在意義と拡大の様相を把握した。

### 4. 研究成果

戦後の文学賞として、水上瀧太郎賞、夏目漱石賞、横光利一賞と、1949年に復活した芥川賞・直木賞の関わりや、そこから登場した戦後の作家達・テキスト群の評価や需要について調査を行った。そして、戦後の新興文学賞が短命に終わる中で、芥川賞・直木賞がその知名度を上げていき、商業文芸誌の新人賞や日本各地の同人誌活動を行っている人々にとっての「目標」化していく過程を確認した。

その中で、1956年、社会的に注目をあつめるきっかけとなった石原慎太郎「太陽の季節」と同期に直木賞を受賞した邱永漢の動向を中心に調査・分析を行った。邱永漢は受賞当時は「台湾出身者」の非日本国籍作家であり、そのような立場での受賞者は芥川賞・直木賞を通じて初めての存在であった。邱永漢の登場とその後の活動は、日本と旧殖民地地域の関わり・外交のあり方にも関わるものであり、受賞直後から1960年に入るまでに様々なジャンルの小説を発表した後、文学に見切りをつけ、経済・金融関係のエッセイ・評論活動に活動の場を映していく邱永漢の状況を追うことで、「直木賞受賞」という肩書きの作用を継続的に見ていくことができた。

一方、戦前に『改造』懸賞創作や『中央公論』原稿募集、芥川賞・直木賞、『サンデー毎日』大衆文芸の募集などに応募し、当選・授賞または佳作となった応募者達の中で、戦中・戦後に作家活動を継続していた人々は、そのような戦後文学賞の存在が大きくなり、文芸誌・文学テキストの市場規模が拡大していく中で様々な葛藤や反発を抱え込んだ存在であることをそのテキスト上に表明していた。その点から、戦後社会の同人誌作家と文学賞における関わりとを調査・分析した。

その中で中心的な存在として調査していたのは、『サンデー毎日』大衆文芸に、1940年に当選した長崎謙二郎と田村さえの夫婦の作家である。両者は戦前から戦時中に様々な同人誌・商業誌に登場し、また多くの作家達の回想記にも現れる。「文壇」において非常に活動的であったことがわかるが、戦後になって純文学系の商業文芸誌では活動の場を失い、大衆文芸誌に時代小説や喜劇小説を寄せつつ、同人誌活動・同人誌運営を行っていくことになる。しかし、そのために経済的に行き詰まり、戦後の純文学系の市場ではついに注目を集めることなく、長崎は亡くなる。妻の田村は、その後長崎との生活と、その中で確信を深めた「女性であること、妻であること、母であること」の困難を自伝的小説に表していくが、やがて同人誌上で消息が途絶えた。

この二人の戦後の活動は日本の現代文学史上では全く顧みられていないが、その活動と終焉からは、戦前から戦後にかけての文学活動・文学市場の「日の当たらない場所」が見られ、そしてそこで格闘するもう一つの文学史を読み取ることができる。この二人の調査は、論文を公開する中で、ご家族から連絡をいただき、詳細を把握することができた。本研究計画を遂行することで、新たな事実と資料体を、公の場に紹介することができた。

同様に、戦前の『改造』懸賞創作の当選作家・田郷虎雄のご家族からも、調査過程で資料のご提供をいただき、特に田郷虎雄が1940年から45年に書いて書き留めていた日記から、文学懸賞当選作家が当選後のどのような作家活動を行っていたか、戦時中の文学活動はいかなるものであったか、そしてどのように終戦・敗戦を迎えたのかを確認することができた。これは、現在翻刻・公開を継続中である。

### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1件)

和泉司、同人作家・「田村さえ」研究ノート -作家、妻、代作者、そして <女性>-、雲雀野、  
査読無、39、2017、23-38

〔学会発表〕(計 4件)

和泉司、1980年前後の邱永漢-小説「女の国籍」を中心に、東アジアと同時代日本語文学  
フォーラム ソウル大会、2017年10月28日、ソウル・東国大学

和泉司、文学運動の記憶を抱え続ける人々-竹森一男「鬼宴」と長崎謙二郎を中心に、  
東アジアと同時代日本語文学フォーラム 名古屋大会、2016年10月30日、愛知県、博物館明  
治村会議場

和泉司、東山彰良『流』～直木賞受賞作を読む、日本台湾学会第13回関西西部会研究大会、2015  
年12月19日、名古屋市立大学

和泉司、「邱永漢「西遊記」を読む 日本における「西遊記」翻訳と邱永漢訳版の意味」、  
東アジアと同時代日本語文学フォーラム 台北大会、2015年11月14日、台北・輔仁大学

〔図書〕(計 1件)

和泉司他、勉誠出版『異郷としての日本 東アジアの留学生がみた近代』、2017、490

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年：

国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

### (2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。